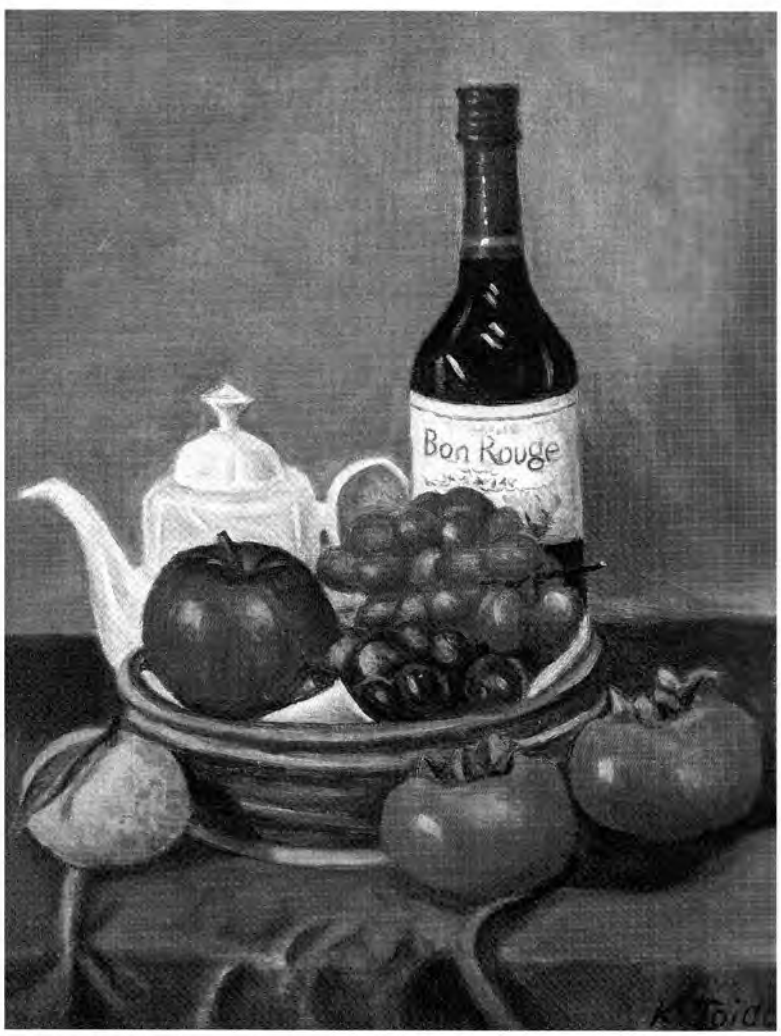
松城

Vol.39
R３年3月１日
発　行

新潟県立村松高等学校
同窓会報

（題字　高女23回卒　中野松葉氏　書）

● 発行責任者／新潟県立村松高等学校同窓会　会長　浅田　光雄　● 事務局／〒959-1704 新潟県五泉市村松甲5545の2 村松高等学校内 TEL0250-58-6003



「ワインと果実」Ｆ6　　戸井田　勝次郎（中30回④卒・定１回卒）

「ワインと果実」の作品は、日本芸術年鑑社発行の「芸術界 2014（祝天皇陛下傘寿記念）」に掲載されたのがきっかけで、クリエイト・アイエム株式会社の強い要望で次の二つの会場に出品し、幸いなことに出品会場毎に受賞いたしました。2012年作の油絵です。

＊「芸術の調」展　2015年
　日本・ベルギー友好 150年記念
　会場　ベルギー　ブリュッセル
　・グランプリ受賞

＊「日本ヨーロッパ交流展」2016年
　会場　東京都墨田区吾妻橋
　　すみだリバーサイドギャラリー
　・日欧芸術大賞受賞

（Ｐ７へ続く）

翔（はばた）け未来へ　松城健児

記念式典　10月16日（土）

創立110周年

激動の中高時代

大橋秀雄（高2回）
（東京都在住）

高校の第2回卒業生です。戦中戦後の混乱の中で私が辿った道筋をご紹介して、若い後輩たちに、こんな時代もあったとお伝えしたいと思って筆を執りました。

＊　＊　＊　＊

私の父は旧十全村新屋の出身で、陸軍軍人の道を歩みました。戦時中はほとんど中国に駐在し、母と四人の子供は東京で時折戻る父を待ちながら暮らしました。敗戦の前年昭和十九年に、私は旧制の都立第四中学校（現戸山高校）に入学しましたが、入学直後に父が北京で戦病死しました。享年四十九、没後陸軍中将に昇進しました。父母の期待を担って、私も父の後を継いでお国のために尽くそうと思いました。

陸軍将校になるには陸軍士官学校に進むのが普通ですが、その前に陸軍幼年学校に入学する道もありました。私はその道を進み、敗戦の年の四月一日、八王子にあった東京陸軍幼年学校に入学しました。入学と同時に沖縄戦が始まり、東京は半ば焦土と化し、戦況はますます逼迫してきました。本土決戦が近付くと、生徒たちも戦力の一翼を担う状況になってきました。七月の下旬、親元に戻って別れを告げるために、三日の休暇が与えられました。

母はそのとき、新屋にある父の生家に姉二人と弟を連れて疎開していました。そこで一家再会を果たしたあと、母はお別れのご馳走にとコロッケを作ってくれました。脂っぽいものを食べすぎたせいか、もともと胃弱だった私は激しい下痢に襲われて立てなくなってしまい、母に帰校延期の電報を打って貰いました。明日戻ろうと思った八月一日の夜、長岡と八王子がほぼ同時刻に焼夷弾の集中攻撃を受け焼き尽くされてしまいました。幼年学校にも三万発の焼夷弾が降り注ぎ、直撃や火災で職員生徒十人が犠牲になりました。私は母に伴われて焼け跡の学校に戻り、テントの中で野営のような暮らしを始めていた仲間と合流しました。コロッケが、私を空襲による直撃から救ってくれました。不思議な運命を感じます。

やがて八月十五日がやってきました。炎天下の焼け跡に整列して玉音放送を聞き、戦争が終わったことを知って呆然としました。校長は、敗戦受諾を予め知って覚悟を決めていたようです。学校はもちろん即廃校ですが、混乱することは何もありませんでした。「これから親元に帰り、文化国家建設に努力せよ」の訓示を受けて、十日ほどのうちにすべての生徒が学校を離れました。私も背嚢を背負った敗残少年兵の姿で満員の上越線にぶら下がり、母のもとに帰りました。

九月の新学期に合わせて村松中学二年に編入が許され、通学が始まりました。晴れの日も、雨の日も、吹雪の日も、毎日片道一里の道のりを歩き続けるうちに私は変わってきました。胃弱に苦しんだひ弱な都会の少年から、心身共に頑強な田舎者に。

冬の通学を見かねた母が、村松の搦手に家を買って引っ越してくれましたが、すぐさま大火で丸焼けになり新屋に舞い戻りました。上の姉は嫁いで去り、次の姉が一家を支えるために美容師の免許をとりました。上町にあった渡辺牛乳店の一階を借りてお店を始め、店続きの一間で一家が暮らしました。

四年が終わる頃学制が変わり、旧制のまま五年に進級して中学を卒業するか、新しくできる新制高校の二年に編入して高校を卒業するか、どちらか選ぶことになりました。私は高校の方を選びましたが、先生、校舎、仲間の顔ぶれは全く変わらず、変わったのは校名だけでした。

私は家庭の経済事情から、高卒後は働いて家計を助けて欲しいと母にいわれるものと思っていました。高三が始まる前、母は「貴方が大学に進むのを助けることはできませんが、自分の力でやるなら、やりなさい」と言ってくれました。この一言が、私が母からもらった人生最大の贈り物だと思っています。

私は東京の大学に入ろうと思いました。結婚して東京に住む姉の家に居候すれば、奨学金とアルバイトでやってゆけそうだと思ったからです。国立以外は問題外で、第一希望を東大に決めました。友達から借りた受験誌「蛍雪時代」を読んで過去問を調べ、何を勉強しなければならないか考えました。数学と物理は特に勉強しなくてもいい、英語や歴史は丸暗記、国語は半ば諦める。自分なりに作戦を立て、実行するしかありませんでした。

上京して一発勝負で入試に臨みました。東大の受験問題は奇をてらわず、基本を理解していれば素直に解ける問題が多かったようです。学校で教えてもらう基本をしっかり理解していたことが、詰め込みの暗記作戦以上に効果があったと思いました。結果は嬉しい合格でした。

昭和二十五年三月三日、卒業式の日がやってきました。進学するもの、就職するもの、故郷を離れるもの、地元に残るもの、それぞれの運命を背負ってばらばらに散っていきました。それから七十年、半数の友はすでに亡く、残りの半分は自力で外出することができない状況になりました。時は休みなく流れてゆきます。

＊　＊　＊　＊

最後に若い後輩たちへのメッセージ。同じ人が二人といないように、同じ人生も二つとありません。みなそれぞ

れの環境に応じて生きてゆかねばなりません。苦しい場面、悲しい場面、きっと様々な困難に遭遇するでしょう。私の経験では、悲観よりは楽観、消極よりは積極、他人をなじるよりは自らの至らなさを自覚する、そうゆう主体的で前向きな姿勢が、きっといい結果を生むでしょう。貴方は世界でたった一人の貴重な存在です。胸を張って生きてください。

七十年前の回想
松高東蒲集団一九五三

平上博資（高5回）
（仙台市在住）

私たちが入学したのは一九五〇年（昭和二五年）、卒業が一九五三年（昭和二八年）でした。戦後まだ五～七年復興半ばの頃でした。創立百周年同窓会員名簿によれば同期生二二五名（男子一四七名、女子七八名）、六クラス編成でした。

当時は学区制で私たち東蒲原郡出身者は、中学三年時に学区内の五泉や村松に転校しての受験でした。「松城」先号の五十嵐廣志氏の記述にもある通り、松高東蒲集団一九五三年卒業は一六人でした。磐越西線の津川駅や鹿瀬駅（私はこれ）などから五泉駅まで約一時間、そこで蒲原鉄道（今はない）の電車に乗り換えての三年間の通学でした。そこに仲間意識が芽生えたのでしょう。二〇〇二年（卒後四九年）津川出身の岡孝一氏や先の五十嵐氏らの尽力で、鹿瀬町の麒麟山温泉に一四人集まりました。それ以来毎年会報を出しながら各地の在住者の近くに集まりました。高齢化のために数年前から会報は出さず、参加者も五・六名になりましたが、今でも続けているのは稀有なことです。

一九五一年はサンフランシスコ講和条約、日米安保条約調印の年でした。高校二年のときです。全国的に「全面講和」か「単独講和」かの議論が沸騰しました。以前から社会的関心の強かった私は全面講和論、クラスに単独講和論の論客村田久君がいて、当時社会科の石塚達也先生が授業時間の一時間を討論の場にしてくれました。何十年ぶりかの同期会で村田君に会い、握手しました。社会部に属していた私は文化祭に同郷の井口光雄君（彼は北大を出て、札幌に在住して後年フィンランド北海道友好協会の会長など大活躍でした）らと計らい原爆展を行いました。一九五三の卒業アルバムに写真があります。彼が東京に行き。丸木位里、赤松俊子の「原爆の図」を借りて来て展示しました。文化祭のあと、五泉町や鹿瀬で一般公開しました。今年二〇二一年一月二二日核兵器禁止条約が発効します。唯一の被爆国日本政府がこれに背を向けているのが残念です。

社会部でお世話になった波多重俊先生からは後年歌集を頂き、その感想文が新潟日報に掲載されました。先生とは賀状の交換がまだあります。入学して間もない化学の試験で皆の成績が悪く、恐い印象の権瓶守先生から「もうみんな東大受験はできないね」と叱られました。端正な感じの数学の水野昭平先生、当時私が観て感動したイタリア映画の「自転車泥棒」の解説をして下さった長谷川先生、「既往を追わず来者を待つ」のことばや「むきやうさみふはなかしし」と教えてくれた国語の二人の先生など思い出します。私は一九六三年（昭和三七年）東北大学医学部を卒業、内科医として地域医療一筋に三年前退職しました。亡くなられた先生方、ご存命の先生方、そして同期の皆さん、ありがとうございました。

（二〇二一年一月二日記）

カナダ駐在回想

相田孝雄（高14回）
（大垣市在住）

私は約三十五年前にカナダ工場勤務を命ぜられ永住権を取得して家族を滞同して移住をした経験があります。

その経緯は私が勤務していた会社は自動車の生産設備のメーカーで、当時日本の自動車は品質、コストで世界を凌駕しておりました。また電気製品、カメラ等色んな産業分野で世界から高い評価を受けていました。そこで世界の自動車トップメーカーのGMから日本のコストパフォーマンスが良く品質を向上させる可能性のある設備を調達しようと、自動車外板の重要部品の製造ラインを作ってくれと我社に依頼が来、取りかかる事になりました。

私がカナダへ赴任する数年前に既にこれからは世界を相手に仕事をすると考えていた社長が治安の良いカナダに工場を立ち上げていました。ある日社長から呼び出しがあり、突然、

「相田君、今度カナダへ行っ